



(上)「34.」のブランド名で、マスク、グングテープや手ぬぐい、地酒のラベルなどさまざまなグッズを制作 (Instagram: @3design4)
 (下)明治時代から受け継がれてきた古民家。標高が高い土地にあるため眺望も良く、庭には柿やキウイも実るこの家でご主人と暮らしている

山深い地域に佇む一軒の古民家。ここを拠点に絵描きとして活躍する能瀬理恵さんは、2018年に岡山市から祖母の出身地である高梁市に「孫ター」して来た。

移住前は1日7〜8時間ほど派遣の仕事をこなし、週末にはマルシェに出店して作品を販売し、その合間に新しいデザインのアイデアを練るといふ、時間に追われる暮らしを送っていた。

「『絵を描いてビッグになるんだ!』って意気込んでいましたね。何か明確な目標があったわけでもなく、ただ広い世界に飛び出したかったんです。若かったんですね(笑)」と、当時を懐かしむ。

夢に仕事に忙しい日々を送る中、ふと思ひ浮かんだのは、幼い頃から親しんだ里山の風景。「田舎暮らしがしてみたい」とまず高梁市の市街地に移り住み、市の空き家情報バンク制度を活

用して物件を探す中で、現在暮らす築100年超の古民家と出会った。

「この家は明治時代に建てられたかなり古い建物なのですが、代々の家主さんが丁寧に手入れしてくださっていたのでとても綺麗だったんです。入居後にリフォームしたのはリビングと納戸のみで、あとはそのままの状態です」

移住後は、市内中心部で開かれるマルシェに出店するうちに人脈が広がり、地域の人づくりにデザインやパートの仕事を舞い込むようになった。現在は自分のペースで仕事をしながら絵描きとしての夢を追う、ストレスフリーな暮らしを送っている。

「ここでの暮らしの魅力は、大自然が身近にある静かな環境と人のあたたかさですね。ご近所さんが『何か困ったことはない

か』という気にかけてくださったり、野菜や果物をお裾分けしてくださったり、人と人とのあたたかい心のわたし合いがあるのもこの地域ならではの魅力です」

テーマを決めず、そのときのインスピレーションで絵を描くことが多いという能瀬さん。そのデザインはモノクロでありながら表情豊かだとか愛嬌があり、あたたかみを感じるものが多い。それは、「わたしあうま」で暮らす能瀬さんの心のゆとりの表れなのかもしれない。

今後の目標を聞くと「いつかは自分のギャラリーを構えて、多くの人に作品を見ていただきたいと考えています」と答えてくれた。

首都圏での個展開催や高梁市を訪れる観光客向けの展示販売会、地元企業の商品パッケージデザインなど、活躍の場は日々広がっている。

02

ひらめきを大切に、
スキルを活かす暮らしで
地域とつながる

髪の癒し処 彩紅
サロンオーナー
柏崎元子さん



ベンガラ色の町家が軒を連ねるノスタルジックな町並みが印象的な、高梁市北西部の成羽町吹屋地区。この地に家族4人で移住して古民家を改装し、髪の癒し処『彩紅』を営んでいるのは、東京都出身の柏崎さん。店の奥では、ネパール出身の夫・ブンジェイバハドゥールさんがカレド店『ネパール人シェフのきいろい台所』を切り盛りしている。

柏崎さんはもともと都内のサロンに勤めていたが、スキルアップを図るため単身でイギリス・ロンドンに移住。現地のサロンで6年間、美容師としてのスキルと英語力を磨いた。そして帰国後、「生き方を変えたい」と思い立ち、今度はインドへと渡って6年間ゲストハウスを運営しながらヨガを習得したという、なんともグローバルな経歴の持ち主だ。

インドでの結婚・出産・育児を経験し帰国。自然豊かで子育てしやすい地域を探していた時、晴れの国・岡山県の吹屋地区が目にとまった。実際に現地を訪れてみたところ、山間に佇む美しい町並みに一目惚れ。気候が良く食べ物もおいしい、子どもたちがのびのび走り回れるゆと

りがあるこの地に、2017年2月に移住を決めた。

晴れの国といえど、吹屋地区は中国山地の懐にあり、冬には町中が雪景色に染まる。移住直後はインドとの環境の変化に戸惑ったという柏崎さんだが、「朝起きて戸を開けると、雪の上にウサギの足跡があった。同じ時を共に過ごしている森の仲間がいるのだと思うと微笑ましく、あたたかい気持ちになりましたね」と穏やかな笑顔で話す。

さらに、吹屋にはかつての日本にあった、世代を越えた人と人の関わり合いの風土が今も息付いていた。

「自分たちがしたことで地域の人に喜んでもらえたり、時にはお叱りを受けたりすることが、



子どもたちにとって、とても良い人間教育になっていると思います。また、地域の方々からよく野菜を頂くのですが、そのお礼に草刈りをしたりカレーのお裾分けをしたり、そんな『わたくしあい』が日常にある今の暮らしに幸せを感じています」

ひらめきを信じて動き、その先でスキルを磨くことで自分らしい世界を広げてきた柏崎さん。「ここではしっかり根を張って暮らしていきたいです。子どもたちにもいろいろな世界を見て、自分にしかできない何かを見つけて、吹屋でも彼らの好きな地域でも、幸せに生きていってほしいですね」と今また新しい未来を見つめている。

(左)元気いっぱい走り回る、マユールくん(10歳)とアンジュちゃん(8歳)。年齢に関係なく地域の子どもたちはみんな友達 (右)「今後は家族で野菜作りにもチャレンジしたい」と話す柏崎さん。裏庭にはヤギやウサギ、ニワトリも共生 (下)1席のみのプライベート空間が広がる美容室。職業柄、地域の人と接する機会が多く、自然と仲が深まったという

03

田舎暮らしの
ゆとりが生む、
自由な発想のデザイン

絵描き
能瀬理恵さん

